

博士論文審査及び最終試験の結果

審査委員（主査） 村尾 誠一



学位申請者 高 艶

論文名 「深沢七郎論——近代を見つめる土俗の眼差し——」

○結論

高艶氏から提出された博士学位請求論文「深沢七郎論——近代を見つめる土俗の眼差し」について、論文審査と口述による最終試験の結果、審査委員会は一致して博士（学術）の学位を授与するにふさわしい研究であるとの結論に達した。

審査委員会は、村尾誠一が主査となり、副査としては学内から現在の主任指導教員である橋本雄一准教授、本年3月まで（特別研修のため離任）主任指導教員であった柴田勝二教授、及び加藤雄二准教授・米谷匡史准教授が加わり、五名により形成された。

○論文の概要

論文の構成は以下のとおりである。

- 一 はじめに
- 二 土俗世界の構築と様態——作家の原点
 - 1 『檜山節考』——近代文学における古典モチーフ
 - 2 『笛吹川』——土俗的旋律を奏でた「交響楽」
- 三 土俗世界の変貌——前近代から近代へ
 - 1 『甲州子守唄』
 - 2 近代都市を描く作品群
- 四 『風流夢譚』と天皇制の問題
 - 1 当時の社会情勢及び天皇制の変化
 - 2 「反天皇制小説」なのか？ 「政治小説」なのか？
 - 3 主人公「私」の位相——スキゾイド的作品である『風流夢譚』
 - 4 深沢七郎と三島由紀夫
- 五 土俗の世界からの眼差し——「近代」に対峙する深沢七郎
 - 1 自然意識と庶民志向
 - 2 ナチュラリストである深沢七郎
 - 3 近代の「世捨て人」
- 六 終わりに

高艶氏は深沢七郎の世界を近代の都市世界を相対化する「土俗」という観点から捉えようとする。深沢のデビュー作であるとともに代表作としての評価を受けつづける『檜山節考』は、その点からももっとも重要な意味をもち、「はじめに」につづく第二章1節で深沢の「土俗世界」を典型的な形で表象する作品として論じられている。ここでは作品の主題である「棄老」が謡曲の「姨捨」など古典文学でもしばしば素材化されながら、そこに多く伴う「月」のモチーフが深沢の作品に現れず、むしろ棄てられたおりんを最後に包む「雪」が前景化されているところに、身近な自然との調和を尊ぶ深沢の個性があるとされる。さらに同じ主題をもつ堀辰雄、井上靖の作品とも比較しつつ、これらが古典文学との連続性を重視しているのに対して、深沢の作品はむしろそれとの連続性が希薄であり、そこに古典的な美意識に距離を取りつつ土俗の世界を浮かび上がらせようとする深沢の志向が見られるという把握が示されている。

またこの作品に特徴的であるのは、表題にも取られている「檜山節」という土俗的な歌謡が作品に繰り返し引用されることで、こうした「音楽」への愛着が深沢の世界を貫流している。深沢は作家となる前はギタリストとして活動をしており、音楽の世界への親炙がその文学作品の表現にも浸透してその個性の一端を成している。しかも作中で使われている「檜山節」は舞台となる甲州地方に受け継がれた歌謡ではなく、深沢自身の創作によるもので、そこに作品に土俗の趣きを含めようとする志向の強さが見られるとされる。

第二章2節では、深沢の郷里でもある甲州地方の庶民の生死を、戦国時代の武田家の興亡を背景として語って『檜山節考』と並ぶ深沢の代表作となった『笛吹川』が論じられている。相次ぐ戦乱のなかで淡々と生と死を送り迎えする庶民の姿を描き出すこの作品を、高氏は「焦点化子」というジェラルド・ジュネットの用語を使って分析し、視点を単一の人物に限定せず、複数の人物を同時に焦点化したり、家や自然にも同等の比重の眼差しを投げかけたりする叙述のスタイルが取られていることを指摘している。それはジュネットの用語を使えば「単一焦点」「二重焦点」「多元焦点」などに分類される多彩な焦点の織りなしがなされているということであり、それによって「交響楽」になぞらえられる広がりをもった世界が成立しているとされる。

第三章では出発時の深沢を特徴づけていた土俗の世界が変貌を遂げていく様相が、『甲州子守歌』を中心として論じられ、それと合わせて深沢と同じく地方世界を描きつづけた戦後の有力作家の一人である中上健次との比較がおこなわれている。ここではこれまでの作品と違って、同じく甲州地方が舞台となりながら、明治末期から太平洋戦争の敗戦までが時代的な背景とされ、深沢的な土俗性を支えてきた村落共同体の存在が希薄になっていく変化に焦点が当てられている。『檜山節考』のおりんに相当する「オカア」という土俗の色合いをもった女性は登場するものの、アメリカかぶれした功利的な徳次郎のような人物が登場する傍らでその存在感は矮小化されざるをえない。そこに深沢の歴史認識と近代への嫌悪が現れているとされる。

こうした地方の風土に根ざした土俗性の崩壊は中上健次にも見られるもので、芥川賞受賞作の『岬』やそれにつづく『枯木灘』では、出身地である和歌山・新宮を舞台として、土方として大地と交わる生活をおこなっていた主人公の秋幸は、1970年代の新宮市の開発事業によって作品の舞台となった「路地」の解体されるのにともない、それまで生き

ていた土俗的、母性的空間から追いやられてしまう。『地の果て 至上の時』に描かれるのはそうした拡散した世界である。深沢と中上を繋ぐ要素として挙げられるのは、『檜山節考』のおりんや『鳳仙花』のフサに代表される母親的女性の存在で、ともに鮮明で迫力をもった人物として描かれている。しかし中上の描く女性が強い生への情念をもって生き抜く存在であるのに対して、深沢作品の女性はむしろおりに示されるように、死への親しさのなかに生きる人物であり、そこに自然の生々流転のなかに人間を位置づけようとする深沢の志向が見られるとされる。両者の比較の後で『お燈明の姉妹』『サロメの十字架』といった深沢の作品に言及され、そこに現れる物欲の強い女性たちに、土俗的世界の対極としての現代の都市空間の姿が写し出されているという論が示されている。また深沢がギタリストとして劇場に出入りしていた頃の経験を素材とする『千秋楽』では、主人公の「ドンチョー」が楽屋の鏡によって踊り子たちの姿を観察する様相が描かれるが、そこに写った彼女たちは文字通り鏡の像としての存在感しかもたず、そうした形で現代の都市住民の根無し草的な曖昧さが浮き彫りにされているとされる。

『檜山節考』の主題や『千秋楽』のモチーフともなっているように、深沢の世界には自身が関わった音楽が深く入り込んでおり、それが素材として使われるだけでなく、作品の色調をもたらしている。深沢はみずから「マンボやロカビリーやウエスタンのような」作品を作ろうとしたと語っており、『東京のプリンスたち』ではジャズやロックなど様々な音楽がちりばめられて、土俗とは別の深沢的世界を構築している。高氏はこの深沢における音楽との関わりを重んじ、文学と音楽が一体となった世界が深沢の作品世界であるとしている。

第四章では、夢のなかという設定で天皇家の人々が殺害される光景を描き、右翼の攻撃を受けるなど物議を醸した『風流夢譚』が中心的に論じられている。作品が発表された1960年は社会党浅沼委員長が右翼少年に刺殺される事件が起こり、また皇太子夫妻の海外親善旅行が行われた年で、あらためて天皇家への関心が高まっていたが、高氏はこの作品のモチーフとなっているものが、戦後「人間」に変貌した天皇への違和感であり、それが天皇家の人々への揶揄的な描出として表象されているとしている。また高氏は『風流夢譚』に一人称の「私」と夢のなかの「私」という二人の語り手がいることに着目し、天皇への「処刑」を描く夢のなかの「私」は現実世界を生きる「私」が生み出したスキゾ的な自我であると述べている。

戦後の天皇への批判意識は当然三島由紀夫によって担われたものであり、三島はまた深沢を最初に評価した作家としても知られるが、高氏は『風流夢譚』の分析につづいて三島の天皇観との比較を試みている。高氏によれば、三島が天皇のゾルレン（理想、理念）性、純粹性を美的に追求し、そこから戦後の昭和天皇への批判がもたらされているのに対して、「庶民」の立場に立つ深沢はむしろ戦後の日本人の奥底に根を張っている天皇の呪縛を問題化しようとしているとされる。

第五章ではあらためて深沢の「土俗的」感性に焦点が当てられ、深沢がその感性に導かれて自身で「庶民」としての生活を実行すべく、1965年に埼玉県南埼玉郡に「ラブミー農場」を拓いてそこで暮らし始めた経緯について論じられている。土俗的な世界を求めて農村での生活を始めた深沢だが、そこで出会うものは都会の住人と変わらない、算盤勘

定のなかに生きる人々であり、土俗との出会いがあるわけではなかった。そこから深沢は次第に「隠者・世捨人」としての相貌を強めていくことになったとされる。

この章で中心的に扱われている、1981年に谷崎潤一郎賞を受賞した『みちのくの人形たち』には、岩手県の山深い里に生きた産婆が「間引き」を重ねてきた自身を罪深い存在と思い、その両腕を切り落としてもらおうとする話が語られているが、ノーベル賞を受賞した現代中国の作家莫言の『蛙鳴』には中絶された赤ん坊を象る人形という近似したモチーフが現れている。両者の間には現代を生きながら土俗的なものへの愛着を残していることや、母なるものへの執着が見られることなどにおいて共通項がある。しかし莫言の作品が政治的・時代的批判性を強く帯びているのに対して、深沢の作品は現実世界への関わりそのものを相対化してしまう隠者的な感覚に貫かれていると結論づけられている。

○論文の評価及び審査の概要

高氏の提出論文は戦後の特異な作家として三島由紀夫らの高い評価を受けながら、その作品に対しては十分な研究がなされていない深沢七郎の作品群を読み込み、近代を相対化する「土俗」の眼差しという観点からその全体像を掴もうとした意欲的な論考である。単独の作品を論じた論評は少なくないものの、その生涯や思想を視野に入れつつ全作品を対象として批評的に論じ、その作家的な個性を捉えた著作はこの高氏の論考が最初であるともいえ、それが外国人留学生である高氏によって成し遂げられていること自体が高く評価されることは疑いない。

各論的には、以下のような点がとくに高評価を与えられる点として挙げられる。

- 1 深沢七郎の世界を貫流する反近代的な性格を「土俗」という観点から洗い出し、それによって主要作品の主題を明確化し、深沢の作家的個性の核心といえるものを抽出することに成功している。
- 2 もともとギタリストとして活動していた深沢のなかにある音楽の世界への親炙を指摘し、それが彼の作家としての個性と結託して独特の作品世界を生み出す因果性を説得力をもって論証している。
- 3 中上健次、三島由紀夫、莫言など内外の現代作家に幅広く眼を配り、深沢の作家的個性を浮かび上がらせている。とくに莫言との比較は中国人留学生である高氏ならではのものが、著者の持ち味を生かしつつ論考に広がりを与えている。

半面8月6日におこなわれた口述最終試験では、審査委員より以下のような点が論考の不充分さとして指摘された。

- 1 「土俗」は抽象的な形では存在せず、必ず土地固有の風土性と結びついているはずだが、多くの作品の舞台となり、深沢の郷里でもある甲州地方の自然風土やそこにはらまれた歴史文化との関わりがあまり明確ではない。ある程度記述されているものの、概念的な水準にとどまっている。
- 2 深沢の世界に底流する音楽との関わりを重視しているのは視点としては優れているが、

深沢が好んだのは現代の音楽であり、作品の基底をなす土俗的なものどどのように連携しているのかが必ずしも明確ではない。

3 三島由紀夫との関連で論じられている天皇に対する認識が深いとはいえない。戦後の「人間天皇」の捉え方も通念的で、思想史的な知見をもっと高めるべきである。

4 中国文学との比較が莫言との間に限定されているのはやや物足りない。土俗的世界を描く現代中国の作家は様々にあり、もう少し比較の対象を広げた方が日中の作家の個性が強く浮かび上がったであろう。

こうした指摘がなされたが、これらはいくまでも一層の論文の水準向上のために加えられた指摘であり、また高氏もそれに対して極力誠実、的確な返答をおこない、今後の研究の課題とすることが明言された。上記のような不十分さが認められるにしても、留学生である高氏が癖のある方言を多く含む深沢のテキスト全体を読み抜き、それらを貫流する特質を的確に摘出し、作家の全体像を捉えたことの価値は揺らぐものではなく、よって「結論」に記されるように、博士（学術）の学位に相当する論文であるという評価が全員一致で下された次第である。